

名立は地滑りの多い地域で、名立川の周りには、斜面崩壊で土がむき出しになっている山が、何カ所も見られる。その中でもひときわ目を引いたのが東蒲生田地区の斜面崩壊だ。昨年10月の台風19号がもたらした災害で、幅100m、長さ150mにわたる土砂が滑り落ち、下を通る用水路まで破壊してしまった。年内を目標に復旧工事が行われているが、作業をしている「のり面工職人」と言われる人たちに目を奪われた。命綱一本で垂直に近い斜面にぶら下がり、作業をしている。のり面に金属の網で四角い枠を組み、そこにコンクリートを吹き付けて固めていくという。

工事を請け負っているの

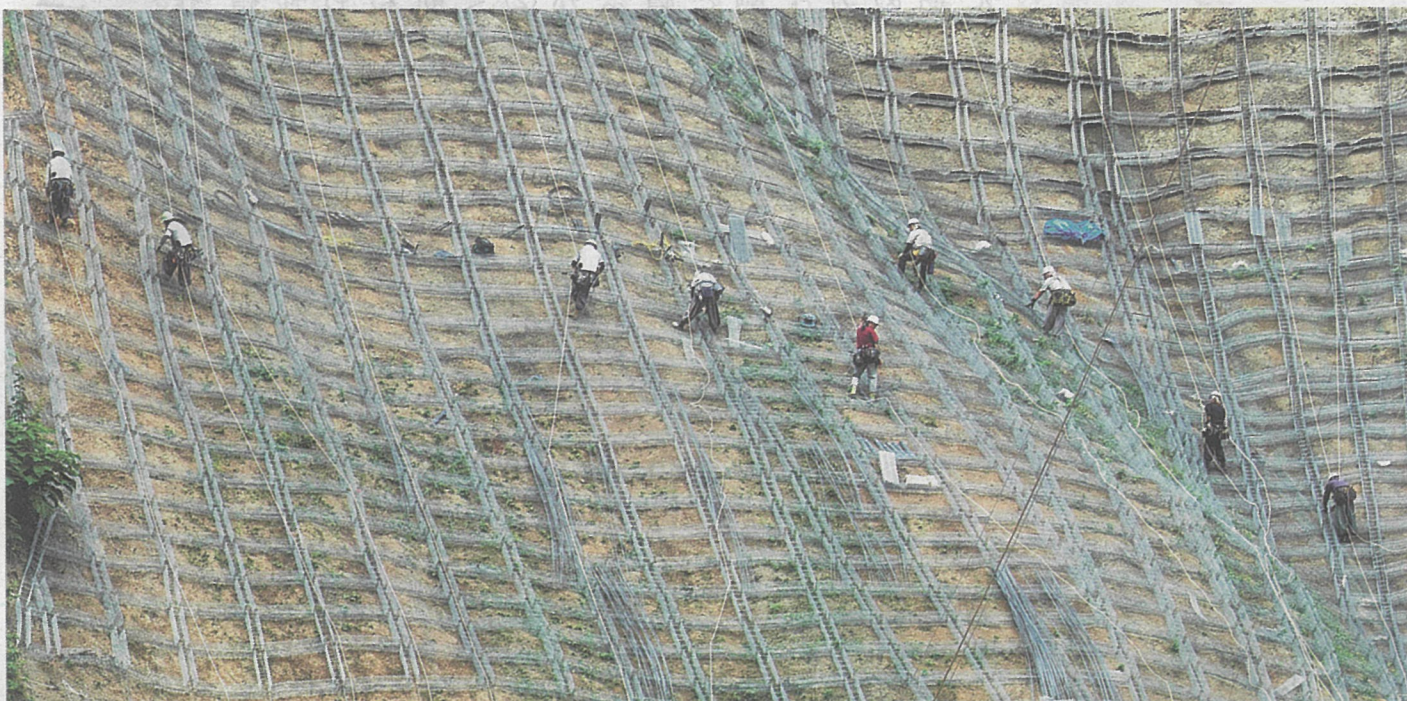


牛木組社長の牛木善彦さん(左)と常務で建設業40年の大ベテラン金子長一さん。牛木さんが言う。「建設業は人手不足が深刻。若い人たちにぜひ来てもらいたい」

急斜面 一糸乱れぬ職人技

は、ここ名立で建設業を始め、昨年100周年を迎えた牛木組。牛木善彦さん(37)は、2年前に会社を継いだ4代目の若社長だ。「この地域の山が土でできていることで、斜面崩壊は多いですね。ただ、これほど大きなのり面工事はめったにありません。のり面工職人も人手不足で、今回は縁があり、山形や青森の職人さんに頼んでいます」

ロッククライマーのようなのり面工職人。何カ月もぶら下がった後は、またどこかの現場でぶら下がる。いったいどういふ人がなるのだろう。職人チームの責任者に聞いた。



「のり面工事は危険を伴う分、特別チームワークが必要な作業なんです。職人を指す人は、そんなふうに全員で息を合わせて進める仕事が好きなたちだと思えますよ」

帰り道、遠くから工事現場を眺めた。大きなのり面に対して、豆粒より小さい職人の姿。この人たちが毎日する手作業の積み重ねによって、大きな自然も少しずつ変えられ、暮らしが守られているのだと思った。

物が落下した場合のリスクを減らすため、周りと協調し横並びで工事を進めていく。昼に降りてくる以外は1日中ぶら下がったまま。女性の職人も1人交じる

水が大地を削る激しい自然の力を、名立で目の当たりにしました。そういう場所で生きる人たちは、長い時間をかけ、小さな努力を日々積み重ねることによって、自然と折り合いを付けていることがよく分かりました。



〈わたべ・よしのり〉 1959年見附市生まれ。中学校教師から、写真家・上山益男氏に師事したのち、91年よりフリー写真家として活動。星空と仕事をしている人の撮影が大好き。

遠くからでも目立つ、のり面工事の現場。見ている方がハラハラしてしまうような急斜面に、9人の職人たちがぶら下がる



■不動森あげ米かい
事務局(久保埜さん)、025(538)2432。メールはfu-moriagemakai@aj.wakwak.com
http://www.fu-moriagemakai.com/
■牛木組
025(537)2316。
http://www.usikigumi.co.jp/index.html